

追憶。「歩け、歩け」で得た体  
験記 その2 明治神宮の不思議  
の森

koberyo1

昭和15年の秋だと記憶する。日本、ドイツ、イタリアからなる三国同盟が発足し、これ以来、日本は転落の一步を踏みだした。当時、軍部はますます意気軒昂で各地で戦線を拡大していった。

この頃、わたしは小学六年生だった。書道に励む一方、悪童ぶりを発揮して代々木練兵場に足繁く行っていた。

代々木練兵場は、いま思えばじつに広大であった。

明治神宮の隣に位置し、歩兵第一連隊、第二連隊の訓練場であることはあとで知った。聞くところによると、毎日、泥だらけの軍服に鉄砲をかついで演習をしていたそうで、少々驚かされたし、不思議に思った。

というのも、わたしが遊びに行った代々木練兵場では兵隊さんの姿を一人も見かけなかったからだ。もう遠くの戦線へと旅立ってしまわれたのだろうか？

明治神宮の毎年の11月3日といえば、例大祭が盛大に行われ、境内ではヨシズ張りの会場に「大菊花展覧会」が行われた。そればかりか、能楽、舞楽が奉納される。

多くの参拝客がぞくぞくとやってきては参拝し、神宮は人々であふれかえった。

また例大祭にあわせて「お楽しみ」もやってきた。

代々木練兵場の一区画には、木下サーカスやオートバイの曲芸乗りの小屋ができるので、わたしたち子どもたちはそれを見るために毎年、「歩け歩け」を楽しんだほどだ。

そしてサーカスには、ほんとうにびっくりした。

サーカスの周囲には物売りや出店がでて、それはそれは賑やかムードだった。欲しいものを買うとき、小銭を何回も数をあらためて渡した幼い日の記憶がいまでもありありと残っている。

当時の日本には、木下サーカスがあったが、サーカス自体、かなり珍しいものだった。靖国神社でも興行していたと聞いたことがある。このお祭り騒ぎの歌声や騒音にふれていると、やはり身も心もウキウキしてくるのだった。

さて、わたしが実際、サーカスをみたときのことである。

木戸銭を払ってサーカスの中に入る。出し物が演じられているときの大勢の観客の歓声や、クライマックスには、しーん、と静まり返り、観衆が息を呑む、こうした会場の雰囲気興奮した。見るものすべてに眼が釘付けになった。

「二頭立ての馬の背に直立し、曲乗りする少女」、「高所ブランコの曲乗り」、「つな渡り」、「ピエロのおどけた自転車乗り」、「サルの大玉乗りの曲芸」などが記憶に残っている。

またほかの小屋では、オートバイがスピードをだして曲乗りをするのだ。それもただの曲乗りではない。

直径15メートルもある木製の樽の内がわの湾曲を猛スピードで走るのだ。

単車が重力にさからうかのように横ざまになって走るさまを観客が上からみる仕組みとなっている。

したがって小屋を設営するにあたっては、相当に広い場所が必要だった。あとオートバイが爆走するものだからガソリン臭でむせかえる人がいたりした。

ここで改めて大東京にある不思議の森、「明治神宮」についても触れておこう。

わたしが幼い頃からなにげなく見ていた森にこのような秘密があったとは、ひどく驚かされた。

というのも、じつは先日、NHKで放送された「明治神宮不思議の森」をみて感じ入るものがあったのだ。NHKでの放送を引用しつつ、わたしの感想も交えて明治神宮の森について書いてみたい。わたしの感動が少しでも伝わればいいのだが……。

神宮の森は、神域として立ち入りが禁止されているが、じつはかつては森ではなかった。ここで世界でも類例をみない大実験がおこなわれたのである。

このことを最近、わたしはテレビのドキュメンタリーで知った。子どもの頃からふれ、みてきた森であるのかかわらずだ。そしてまた、明治神宮の入り口、すなわち表参道が原宿と知ったのは、相当あとになってからの話である。

さて、ここで明治神宮をよりよく知るために、さらに深く掘り下げてみることにしよう。

明治神宮の面積は、約70ヘクタール。ビルが建ち並ぶ都心では皇居に次ぐ緑地である。参拝客はおよそ年間1000万人にもおよぶ。

さきほどかつては森ではなかった、と書いたが、もともとは荒地であった。そこに森をつくるために大正の初めごろから準備がはじまった。

日本で初めての樹林学者「本多静六」がリーダーとなり、森をつくるのに必要な樹、すなわち「献木」を全国に呼びかけたのである。

するとその反響は凄まじく、日本全国からなんと10万本を超える木が寄せられた。「献木」の輸送のため、原宿駅から専用の線路が新たに敷設したほどである。このエピソードを耳にするだけでも、当時の熱意がひしひしと伝わってきて、わくわくする。最盛期には、なんと一日30車両もの貨物列車に樹々や資材が積まれ、到着したそう。

ただし、どんな樹々でも良い、というわけではなかった。

本多静六がめざしたのは、人の手をくわえることのない、永遠につづく森だった。たしかに人の手が入っているが、人工の森をつくろうとしたのではない。

自然界で起こりうる樹々同士の「生存競争」、「淘汰」をも視野に入れ、大きな針葉樹を植えたあいだに小さな広葉樹を植えたのである。

そのあとはなるべく人の手を加えない。するとどうなるのか？

50年、100年もの時間を経過するあいだ、樹々の生存競争がおのずと発生し、針葉樹が淘汰される。最終的には生態学的にも非常にバランスのとれた「自然界そのもの」の常緑広葉樹林が出現することをめざしたのである。これを本多静六は、「木苑計画書」として作成した。

何度も言うが、わたしはテレビをみていて「自然界そのものの森」をつくろうとする営為に驚いた。それは壮大な「時間」の観念を前提とする。私たちの生命が、永遠につづく時間のなか、子々孫々にわたりリレーされてゆくものにも似ている。自然とともに生きる「広大さ」にひどく心を動かされたのだ。もしかしたら、これは古くから日本人が魂の奥にもちつづけた「想い」かもしれない。ともあれ、明治神宮の森は、その完成については自然の手にゆだねられ、その事業はいまもなお、未完成のまま継続中だ。わたしたちの生命が常にそうであるように。

特筆すべきは、多くの野鳥が神宮の森に暮らしているという事実である。

たとえば森の王者「オオタカ」が1980年代頃より生息をはじめ、その後。毎年のように子育てをするさまが観察されるようになった。

森の深度が深まり、オオタカが20メートルもの巨木に巣をつくるとは誰が予想したろうか。

考えてもみてほしい。明治神宮はかつて荒地だったのだ。東京は世界屈指の大都会であるが、その都会の真ん中に太古の森が出現し、さらにそこが世界のどこにも類例のない「不思議な森」が出現したことに心打たれた次第である。

参考資料：「NHK 明治神宮 不思議の森」